11・28全学労連・全学労組

中央行動総決起集会アピール

本日ここに、全学労連・全学労組の両者が出会い、学校現場で働く者の思いを共有し、総決起の集いを獲得できたことをともに喜びたい。それは30余年にわたる学校を職域とする独立系労働運動の歴史にとって、きわめて大きな意義をもつに違いない。

本日以降、私たちはさらにこの絆を強くし、運動の相互交流を推し進めていこう。職種の違いを互いに尊重し、互いの異なる部分を、それぞれの鏡として自身の位置を一層深く理解する、それが職域を同じくする私たちの連帯の、最大のテーマであり同時に強みともなるだろう。

さらに私たち両者は、日教組が刻んだ轍を再び踏まない。国民教育論に依拠し、その末路として文科省のパートナーと堕した組織といちはやく訣別し歩んできた私たちなのだから。私たちが必要としているのは、見せかけの数でも空虚な団結のかけ声でもない。、末端の現場でいやなものはいやと言い、不当なものは不当とし、その因って来たる要因を突き止め、打ち破る、そうすることによって労働者としての誇りをもった生き方を模索する労働運動である。

2008年11月、世情はアメリカに端を発する金融不安に揺れ、急速に進む格差社会化はとどまるところを知らない。学校現場にあっても、市場原理主義、競争主義が随所に導入され、現場労働者に対しては、人事評価制度、成績主義、それによるあからさまな差別賃金の導入が行われている。行革合理化の一環として学校事務職員制度の解体につながる学校事務の共同実施が、いまは「教員の子どもと向き合う時間の確保」という新たな名目のもとに推進されている。格差社会を一層助長するや非正規労働者の更なる増加が図られている。学校のなかには、あらたな職として、副校長や主幹教諭、指導教諭などが導入され、さらに事務長を導入する動きもある。かててくわえて教員免許更新制という世紀の愚策が来年にも始められようとしている。

東京、大阪、横浜をはじめ全国各地で新自由主義的手法をもった首長が市場原理主義による教育の「民営化」攻撃を強め、いまや学校現場は政治による格好の草刈り場と化しつつある。

そうしてここ数年の教育改革の嵐の中で、私たちの現場は消沈し、ひたすら大風が吹き去るのを待っているような感がある。しかし、風は止まない。それどころか強まるばかりである。首をすくめればすくめるほど、容赦なく風は吹き付ける。わずかでも私たちが顔を上げ続けなければ、現場は根こそぎその基盤を破壊されてしまうだろう。

そんな中、本日報告されたまさに私たちの職場から発する各地の闘いは、明確に、現在の状況に対峙し、現場的な知恵と工夫によって、勝利を紡ぎ出してきている。大きな勝利とは言えないが、小さなひとつひとつの勝利こそが、首をすくめ続ける現場がもっとも欲しているものなのである。

本日ここに結集した全学労連と全学労組の多くの仲間たち、そして駆けつけてくれた心強い支援の仲間たち、そして全国の現場で苦闘する仲間たちとともに、私たちは、本集いで獲得された現時点での闘いの水位を明確に見定め、現場での連帯はもちろんのこと、今後長きにわたって闘いの随所で、ともに熱い連帯を築いていくことをここに強く宣言する。

2008年11月28日

全学労連・全学労組全国総決起集会参加者一同